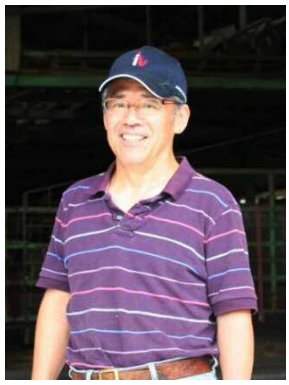
都市近郊で和牛繁殖経営
～地域とともに生きていく～

長久手市　川長牧場（川本健治さん）
畜産（和牛繁殖）

【平成 30 年 10 月 17 日掲載】

名古屋市に隣接し、近年急速に人口が増加している長久手市（平成24年までは長久手町）において、和牛繁殖を営む川長牧場の川本健治さんをご紹介します。川本さんは、地域住民の畜産に対する理解促進に努め、都市近郊だからこその畜産経営を実現しています。

研修先で学んだ「地域とともに発展する姿」



川本健治さん

川本さんは、家畜商と肉牛の肥育を営む家に生まれ、長久手町にあった愛知県立農業技術大学校を卒業後、半田市でホルスタイン種の肥育を営む小栗牧場で１年間研修し、牛を育てる技術や労働の厳しさを学びました。当時、小栗牧場の社長が中心となって、ヘルパー制度の構築など地域や行政を巻き込んで畜産業を発展させているところで、その姿は川本さんにとって仕事の姿勢や考え方の基礎となりました。さらに社長は、一研修生である川本さんを 10 日間のヨーロッパ視察に送り出してくれるなど、人材育成の観点からも先進的な視点の持主で、これまで自分の親の姿しか知らなかった川本さんに大きな影響を与えました。研修後、昭和 57 年 23 歳のときに就農しました。

都市近郊の酪農経営の難しさを痛感

昭和 61 年、父の昇さんが肉牛の肥育に加えて酪農を開始し、乳肉複合経営となりました。朝夕の搾乳や飼養管理といった作業は主に川本さんが担当し、乳量の安定に努めた結果、搾乳頭数は平成 10 年代に最大 50 頭まで増加しました。一方、当時の長久手町は、幹線道路や商業施設がどんどん造られ、住宅が急増していたため、糞尿の処理の問題に直面しました。酪農では、乳を生産するため食料と水をたくさん与えることから、糞尿の量も非常に多いという特徴があります。長久手町の酪農家は川本さん以外に５戸ありましたが、糞尿の処理の設備投資をあきらめて廃業しました。川本さんもこの先、酪農を続けるための投資を行うのか、酪農をやめて別の道に進むのか、岐路に立たされました。

選択に影響を与えた娘の存在

この岐路において、川本さんの選択に大きな影響を与えたのは障害をもつ娘さんの存在でした。当時娘さんがお世話になっていた障害者支援施設は、地域の理解や認知度が低い状況にありました。川本さんは、様々な立場の親と共に子供の将来について話し合う中で、「障害者が本来の人間性を取り戻し、親亡きあとにも地域で生きていける社会にする」ための地域作りが重要と認識

し、平成４年に障害者の子供をもつ父親による有志の会を立ち上げました。有志の会において、地域や行政に対しての理解促進のためには、通年で農業に触れ合うイベントが効果的と考えて、平成８年から「トマトの収穫祭」などを始めました。この取組の中で、牛を育てることも施設利用者や地域住民の体験になるのではないかと思い、平成 17 年に和牛２頭を導入しました。残念ながらイベントでの活用にはつながりませんでしたが、このとき和牛を育てることの面白さを再認識し、糞尿の量が酪農の１／３になることもメリットに感じて和牛繁殖を始めました。

放牧を活用した和牛繁殖経営

放牧地の様子（中央上の家の見える場所が、100 戸以上の新興住宅地）

和牛はホルスタイン種と飼養管理がずいぶん異なることから、試行錯誤を繰り返しました。しかし、苦心しつつも和牛の頭数を着実に増やし、平成25年には繁殖母牛50頭となり、酪農をやめて完全に和牛繁殖経営に移行しました。

また、和牛を飼い始めた当初から、放牧に取り組みました。放牧は、飼養管理の負担軽減や妊娠中の母牛の運動量の増加による難産の減少を目的としています。小高い丘になっていて耕作のしづらい農地を地主から借りて始めたところ、少しずつ貸し手が増え、現在の放牧面積は約３ha に増えました。年間を通して、妊娠中の母牛のうち体調のものを選んで、多い時には 10 頭程度を放牧しています。この放牧地を近隣の新興住宅地の住民が散歩に訪れて眺めていくなど、地域の畜産への理解促進にも役立っています。

さらに、川本さんが和牛の飼養頭数を増やしていた時期は、ちょうど和牛の販売価格が右肩あがりの時期に重なり、経営も安定するようになりました。

地域とともに生きていく

川本さんにはもう一つの顔があります。馬にほれ込んで現在 10 頭を飼育し、地域のお祭りに貸し出しています。伝統行事であり地元の氏神に献馬を行う「長久手の警固祭り※」のほか、他の市町の伝統的なお祭りに川本さんの馬が出演しています。川本さんは、それぞれのお祭りで馬方の役の人たちに、馬の扱いや予行演習の指導を行うなどお祭りを支えています。この取組を通じて、畜産を営むだけでなく、地域の人に必要とされ、地域とともに生きていく姿を周囲に示しています。（※長久手の警固祭り：火縄銃の発砲が見どころで馬の背に標具（ダシ）を乗せ、鉄砲隊や棒隊などが馬を警固しながら練り歩き、五穀豊穣を祝うお祭り）

「畜産も障害者施設も社会に必要だけど迷惑がられることもある」ことを認識した上で、地域に理解を得ながら経営を続ける川本さん。川長牧場には後継者がいないため、この先の事業継承についてどうすべきか真剣に悩んでいるところですが、今後、人材育成にも取り組みできればこの牧場を残したいと考えているそうです。これまで、知り合った様々な人に影響を受け、影響を与えてきた川本さんだからこその都市近郊の畜産経営を、この先も実現してくれることと思います。

衛生的に管理された牛舎

執　　筆：農業経営課
取材協力：尾張農林水産事務所農業改良普及課

Copyright (C) 2018, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.